

農家生計において動植物性採集食材が食材の多様性に与える影響

-ラオス中部農山村の事例-

Effect of wild animal and plant foodstuffs on dietary diversity in rural livelihood

-A case study of farm village in semi-mountainous areas, Lao PRD-

○羽佐田 勝美 * スニー ポンドゥアンシィ **

Katsumi Hasada, Souny Phomdouangsy

1. はじめに

ラオスではカロリーベースで栄養状態は改善してきたが (Ministry of Planning and Investment, Lao PDR 2010)、栄養素や多様な食材の摂取といった食の質と関係の深い成長阻害、低体重、微量栄養素欠乏の改善が東南アジア諸国の中で遅れている (FAO 2014)。例えば、五歳未満児の成長阻害の割合は 46% であり、その多くは山間地に集中している (Ministry of Agriculture and Forestry 2013)。一方、食料安全保障や栄養摂取の観点から、ラオスでは自給や購入のみでなく自然から採集される動植物 (以下、「動植物性採集食材」とする。) の役割が重要である (木村ら 2014)。しかし、栄養や食材の多様性に対し動植物性採集食材の果たす役割に着目した研究事例は少ない。ラオス中部の農山村において、著者らが地域住民の食事調査をした結果、地域住民の食事における動植物性採集食材の利用頻度は高く、また全食材に占める割合が高いことが明らかになった。地域住民の食生活において、動植物性採集食材は重要な役割を果たしており、特にその傾向は相対的に収入の低い世帯において顕著であった。しかし、動植物性採集食材が地域の食料安全保障や栄養改善に果たす役割を明らかにするには、利用頻度だけでなく、食材の多様性や栄養素などの観点からの評価も必要である。そこで本報では、食材の多様性の観点から農山村の住民の食生活における動植物性採取食材を評価した。

2. 調査対象地及び調査・分析方法

調査対象地は、ラオス中部のビエンチャン県ファン郡N村である。N村には住居周辺の低地に水田、川やため池などの水辺があり、村近縁は丘陵地、森林で構成され、これらの空間から動植物が採集され、利用されている。これらの特徴はラオス中部の農山村が一般的に有する特徴である。農家の主要な生業は低地水田における水稲栽培と丘陵地や森林における焼畑陸稲栽培である。主に水稲栽培を実施する農家と焼畑陸稲栽培のみを実施する農家から、それぞれ平均的な耕作面積を持ち、かつ平均的な家族構成の世帯を4世帯ずつ抽出し、計8世帯の農家に対し食事調査を実施した。調査方法は記帳と写真撮影とし、調査対象農家に依頼して朝昼夕の食事でも利用した食材とその入手方法を記帳し、料理と食材を写真撮影した。収集された食材データから食料消費スコア (World Food Programme 2007) (以下、「FCS」とする。) を算出し、食料消費評価基準により食材の多様性 (一定期間に摂取した異なる食材の種類数) を評価した。また、動植物性採集食材の利用頻度が FCS の増加にどれほど貢献しているかについて検討した。雨季と乾季の季節の食材の多様性を比較検討するために、調査期間は雨季の 2014 年 9 月 1 日から 9 月 30 日までの 1 ヶ月間と、乾季の 2015 年 2 月 7 日から 3 月 6 日までの 1 ヶ月間とした。また、選定した 8 世帯を相対的に収入の高い世帯と低い世帯に分類し、FCS を比較した。

* 国際農林水産業研究センター (Japan International Research Center for Agricultural Sciences)

** ラオス国立農林研究所農林業政策研究センター (Agriculture and Forestry Policy Research Centre, National Agricultural Forestry Research Institute, Lao PDR)

キーワード: 食の質、動植物、食材、採集、収入、食料消費スコア

3. 調査結果及び考察

8世帯の季節別のFCSを図1に示す。食料消費評価基準では、FCSが21以下で食料消費が貧弱(Poor)、21を越え35以下でボーダーライン(Borderline)、35を越えると許容範囲(Acceptable)と評価される。

雨季における農家世帯Dを除き、全ての農家世帯で、雨季も乾季もFCSは35を越えていたことから、評価判定は許容範囲(Acceptable)であった。2006年に世界食料計画(WFP)が実施した食料安全保障に関する調査において、ビエンチャン県では許容範囲である世帯が調査世帯の96%であり(World Food Programme 2007)、図1の結果もその傾向にほぼ従うものであった。

動植物性採集食材の利用頻度とFCSとの関係について、図2に雨季の結果を、図3に乾季の結果を示す。雨季の利用頻度とFCSとの間に正の強い相関が見られた。FCSは食材の多様性と利用頻度から算出されるため、食事における動植物性採集食材の利用が食材の多様性に貢献していると示唆された。また、雨季の動植物性採集食材のうち動物性採集食材のみの利用頻度とFCSとの関係を見てみると、この相関はさらに強くなった(図4)。つまり、動物性採集食材の利用がFCSの増加に貢献していることが示唆された。特に、相対的に収入の多い世帯に比べ、相対的に収入の少ない世帯にその傾向が強いことがわかった。このことから、雨季において相対的に収入の低い世帯は、自然から動物性食材を採集し利用することで、多様な食材の摂取を実現していると考えられた。

4. 今後の展開

本調査により、動植物性採集食材の利用が食材の多様性に貢献していることが明らかになった。食の質の観点から動植物性採取食材の重要性を明らかにするためには、もう一つの課題である栄養素について検討を行う必要がある。特にラオスの農村で摂取不足が懸念されている栄養素の一つであるタンパク質の供給に対し、動植物性採集食材の利用がどの程度貢献しているかを明らかにし、食生活における動植物性採集資源の栄養供給の改善に果たす役割を評価していく。

【参考文献】

- FAO (2014) The State of Food Insecurity in the World
- 木村健一郎・小林慎太郎・米田令仁 (2014) 「ラオス中部の農山村で採集される非木材林産物の経済的価値：ビエンチャン県ファン郡N村の事例」、『環境情報科学学術研究論文集』, 28, pp.55-58
- Ministry of Planning and Investment, Lao PDR (2010) Poverty in Lao PDR 2008
- World Food Programme (2007) Comprehensive Food Security and Vulnerability Analysis

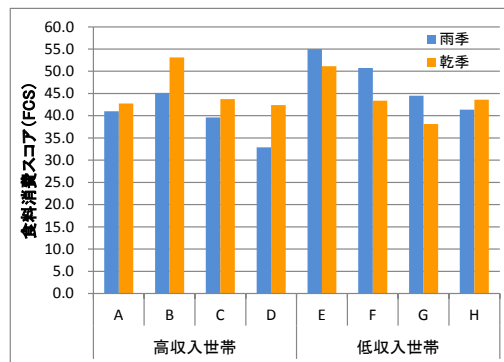


図1 世帯の季節別食料消費スコア
Fig. 1 FCS of households in the different seasons

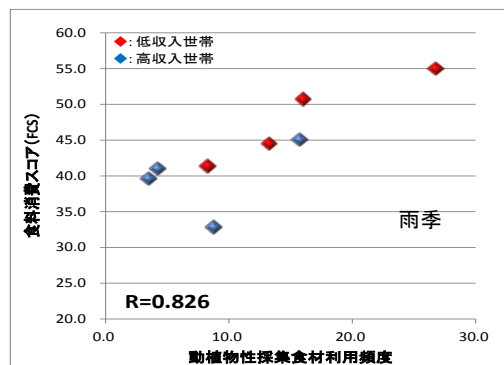


図2 雨季における食材の多様性と動植物性採集食材の利用頻度の関係
Fig. 2 Relationship between FCS and utilization frequency of wild animal and plant foodstuffs in wet season

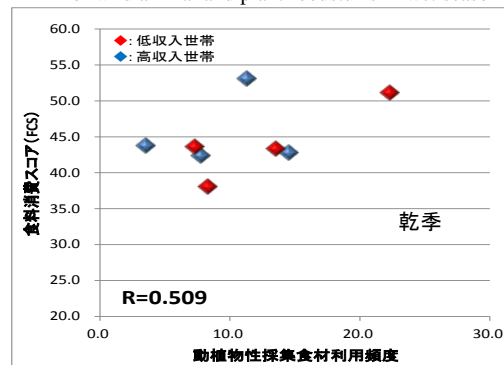


図3 乾季における食材の多様性と動植物性採集食材の利用頻度の関係
Fig. 3 Relationship between FCS and utilization frequency of wild animal and plant foodstuffs in dry season

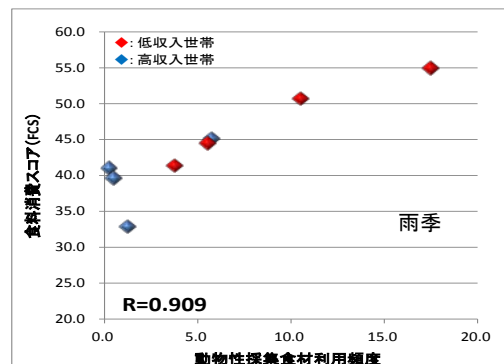


図4 雨季における食材の多様性と動物性採集食材の利用頻度の関係
Fig. 4 Relationship between FCS and utilization frequency of wild animal foodstuffs in wet season